

映画祭あれこれ

プラン 復活！名作シネマ劇場

吉水 英人 四日市市文化会館副館長

四日市市文化会館では、1984年（昭和59年）から2007年（平成18年）まで「名作シネマ劇場」とタイトルをつけた映画鑑賞会を開催していた。毎年、洋画・邦画を織り交ぜながら6回程度上映していた。折しも四日市内の映画館が減少傾向となりレンタルビデオ（DVD）が普及する前ということやハリウッド映画全盛期にスクリーンで鑑賞した世代の皆さんが第2の人生を迎えたことなどが重なり、大盛況であった。しかし、デジタルコンテツの急速な普及とシネマコンプレックスチェーンの台頭や上映するフィルムの劣化による画像の乱れなどにより23年間続いた「名作シネマ劇場」は終了した。一方、デジタル技術が映画の製作から上映までの全領域にわたって、急速かつ広範に浸透しつつあり、またデジタルリマスターにより名作映画が甦っている。

私も昨年末に公開された「午前十時の映画祭」で『砂の器』を観た。『砂の器』は、約40年前の作品であるためリ

アルタイムで観ることは出来なかったが、「名作シネマ劇場」やビデオで何度も観ており、後世に伝えたい作品の一つに挙げられる。時代背景に若干の古さは感じられるものの、色補正や音質の調整などされたものがスクリーンに映し出される。丹波哲郎をはじめとするいぶし銀の名優たちが随所に登場し映画に深みを持たせ、事件の解明が日本の四季折々の風景と交響曲「宿命」の演奏を織り交ぜながら描かれ、逃れられない父子の宿命を訴えかけるクライマックスは圧巻だった。

四日市内では、フィルムコミッションが発足し映画誘致活動が本格化している。また、一昨年に「映画で四日市と人を盛りあげていこう！」を合言葉に四日市☆映画祭準備委員会が発足し、昨年には「第0回やろに！四日市☆映画祭」が開催された。今秋には、同委員会により本格的な映画祭が企画・開催される予定だ。四日市市文化会館としても連動した催物が企画できないかと考えていたおり（優秀映画鑑賞推進事業）を見つけた。本事業に申し込みをし、10年ぶりの「名作シネマ劇場」が復活できるよう検討中なので、実現の際には本誌の愛読者もごぞつてご鑑賞いただくようお願いします。